

第4回日本サケつりサミット in 木戸川

サケつり河川関係者会議（サミット）

☆今、ふるさとが輝くとき☆ サーモンフィッシングが繋ぐふるさとづくり

☆協議結果の記録

1. 日時 平成22年10月 8日（金）15:00～17:20
2. 場所 福島県楡葉町コミュニティセンター
3. 出席者 39名
参加7河川関係者 — 北海道：忠類川、茶路川、浜益川
青森県：奥入瀬川
福島県：木戸川、請戸川
新潟県：荒川
オブザーバー — 水産庁、福島県庁、北海道庁

4. 協議結果

(1) あいさつ

①全国サケつり河川協議会 会長代理 藤本副実行委員長（主催者あいさつ）

- ・平成7年に忠類川で始まった本事業は、今や全国14河川となり、川のサケつりが段々認知されてきた。本事業は単純なサケつりではなく、地域振興であり、大きな経済効果を生んでおり、地元にとってかけがえのない財産になっている。サミット会議は、サケつりに関わる人が皆で話し合い、皆で良い方向に進めて行こうという主旨であることから、忌憚の無いご意見をお願いしたい。



②開催担当河川 木戸川実行委員会鈴木委員長（楡葉町副町長）（開催担当者あいさつ）

- ・本事業は地域にとって大変重要な役割を果たしているが、普及宣伝、地域振興などまだまだ検討事項が山積している。当町におけるサミット開催は事業推進のための絶好の機会であり、本会議を実効性のある有意義な会議とし、今後の事業の進展につなげたい。

③来賓 水産庁資源管理部沿岸沖合課 山崎釣人専門官（来賓あいさつ）

- ・以前は海外まで行かなければできなかったサケつりが、今では気軽にできる身近なレジャーになったことは素晴らしいことであり、皆様の努力の賜物である。遊漁制度にご意見やご不満もあるかと思うが、皆様のご意見を伺いながら施策を進めて参りたい。

④開催地 檜葉町 草野町長（歓迎のあいさつ）

- ・本事業は全国各地から申し込みがあり、川のサケつりへの釣り人の関心の高さを感じている。この事業は内水面漁業の振興とともに町の PR にもなっている。サミット会議は全国のサケつり関係者の皆様がサケつりの振興について話し合う場であり、この機会に勉強させていただきたい。サミット開催にご尽力いただいた関係者の皆様に感謝を申し上げる。

(2) 各河川の状況報告、課題等について

①忠類川

- ・今年は猛暑で川水が少なく、サケの遡上数も少ないため状況は良くない。
- ・本州などから来る修学旅行生のサケつり体験、一般の初心者を対象としたサーモンフィッシングスクールを毎年継続して行い、参加者の確保に努めている。
- ・忠類川ではたくさんのサケ、マスが自然産卵している。忠類川河口周辺のサケの漁獲量が多く、自然産卵のサケが戻ってきていると考えられる。
- ・今年初めて北海道大学が忠類川でサクラマスの遡上生態に関する調査を行なった。忠類川関係者が協力し、釣ったサクラマスに発信機を付けて放流し、遡上や産卵に関する行動を追跡している。来年も継続して行う予定である。もしサクラマスも釣獲調査の対象になれば、5月～11月まで事業ができ、地元にとっては大きな観光資源になる。



②茶路川

- ・河口の 100m 上流から釣りができるので、半分は遡上したての銀毛の魚である。茶路川のサケは魚体の大きい個体が出て、これまでの最大記録は平成 15 年に釣れた 107cm である。大きなアメマスも釣れ、根強い人気があって全国から釣り人が来ている。
- ・今年は猛暑で川が渇水となり、サケの遡上も少なく、状況は良くない。
- ・地元の釣り愛好家の皆さんがボランティアで指導員となり、毎日のように川を訪れ



て釣り方やルールについて指導している。

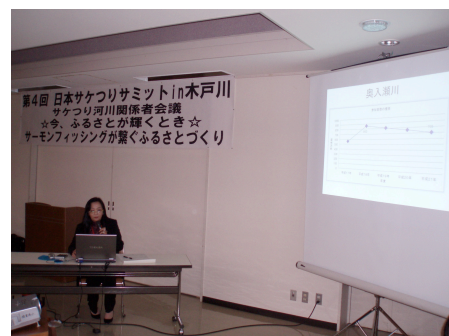
- ・釣った魚の 1,000 本目ごとに釣った人に記念品として地元水産物を提供する催しを行っており、サケつりと地場産品の PR を図っている。
- ・これまでに本州から来る修学旅行生や地元周辺の中学生、小学生のサケつり体験を受け入れており、子供のうちからルール・マナーを教えることが大事であると感じている。
- ・一番の悩みは増水であり、茶路川は大雨が降ると 3~4 時間もすれば増水してまっ茶色の濁水になり、水が引くまで 1 週間もかかる。

③浜益川

- ・平成 13 年以降、参加者数の減少傾向が続いていることが最大の課題である。
- ・ルール違反者が依然として多く、苦情が多いことも課題である。
- ・ルール違反を防ぐことと、リリースしたいという人の要望に応えるため、平成 21 年から引っ掛け釣りなどのルール違反者が多い上流 200m をキャッチ&リリース区間とし、同時に下流側の監視しやすい区間を 150m 拡大した。
- ・常連の釣り人に「ボランティア指導員」の任務を依頼し、ルール・マナー、釣り方の指導などをしていただいているが、指導員の人数が不足しており、人員の充実が必要である。
- ・ルールを守り皆で楽しく釣っていただきたいので、ルール違反者は来てもらわなくて良い。ルール・マナーの指導を徹底し、信頼の回復に努めたい。
- ・参加者の減少に伴い収入が減少し、採算性を維持することが課題であるが、参加者から継続の要望が多く、またサケつりは地域の活性化につながっていることから、継続するために必要な検討を進めている。

④奥入瀬川

- ・参加者数は緩やかな減少傾向である。新規の参加者を増やすための対策と、リピーターを確保するための魅力づくりが必要である。
- ・平成 21 年の釣果はサケ 2,525 尾、1 人当たり 3.58 尾/人と良い結果であった。
- ・奥入瀬川でサケつりができることを始めて知ったという人がいまだに結構いることから、さらなる周知が必要であると感じている。
- ・奥入瀬川では当日券と前売券を設定し、当日参加、日程変更も可能にしている。県の努力により当日許可が可能になり、参加者にとっては便利になった。ただし、実行委員会事務局は名簿作成などの業務を確実に行う必要があり、責任が重くなった。



- ・奥入瀬川の特徴のひとつは、増水が減多にないことであり、増水しても翌日には回復する。また、雪は少なく、サケの遡上時期が遅いので、12月後半まで釣りが楽しめる。

⑤荒川

- ・平成21年は参加者は前年より若干減少したが、釣果は良くサケ2,142尾であった。釣果に波があり、やってみなければわからないという状況である。
- ・参加者の中には大きなオスを釣りたいという方が多い。平成19年には12kgのサケが釣れた。
- ・参加者にくじ引きで塩引鮭500本を提供するサービスを行っている。
- ・荒川は昔からサケ漁の文化があり、刺し網漁業を営んでいる方が40人ほどいる。サケつりを開始したときは調整が難しく苦労したが、今は理解が得られている。
- ・荒川周辺では猟も盛んであり、猟友会と共存しながら進めている。

⑥請戸川

- ・参加者は増加傾向にある。平成21年は前年より減少したが、台風の影響によるものである。
- ・今年は応募枠930名に対し2,245名の方から応募があった。
- ・釣った方はオス2尾まで持ち帰ることができ、釣れなかった方にはオス1尾を贈呈している。
- ・参加者全員に町の特産品の焼物のマグカップを記念品として差し上げている。毎年デザインを変えており、コレクターになっている方もかなり多い。
- ・現地には監視員を常駐させており、6名の監視員が毎日3名体制で監視業務に携わっている。

⑦木戸川

- ・昨年は応募枠1,562名に対し4,131名の方から応募があった。当選しても例年3割くらいは来ないので、キャンセルを見込んで当選者を3割多くしている。
- ・東京方面からの参加者が多く、初心者が多い。
- ・近年はサケの遡上が遅くなっているため、平成21年は前年より1週間遅く開始したが、それでも最初の1週間くらいは釣果が悪い状況であった。
- ・昨年からアドバイザーとして釣りのプロを要請し、現場で参加者にルール・マナーや釣り方を指導しており、好評を得ている。
- ・木戸川では参加者が釣った魚は持ち帰らせず、漁協からオス2尾を差し上げている。



- ・参加者へのアンケート結果では、釣りをしている場所の近くで鮭漁の網を引かないで欲しいという要望、自分で釣った魚を持ち帰りたいという要望などがある。
- ・木戸川は一時期サケの遡上数が本州で最も多く、テレビなどでよく報道された。

(3) 各河川が協力してできる取り組みについて

○各河川のホームページに「日本サケつり河川マップ」を追加し、各河川の場所、概要が簡単にわかるようにする。

(これまで各河川のホームページをリンクしていたが、それぞれの河川の場所が分かりにくいという課題があったため)



○全国協議会事務局より趣旨について説明

- ・サケつりサミットの目的のひとつは、主に参加者数を増やす為に各河川が協力して何ができるかであり、各河川から出た意見のうち複数の河川から出た意見は、①ホームページ上の協力ー全河川の情報をわかりやすい形で情報提供する(統一様式などで)、②つり人のルール・マナーの向上、③基本的なルール・マナーの統一(釣具規制の統一も含む)、④全河川が協力した宣伝ー共通パンフレット等、⑤全河川によるイベントの実施ー全河川で一番の大物を釣った人を表彰、全河川で釣った人を表彰、スタンプラリーなど、である。
 - ・何かを行うとすれば全河川で取り組まなければインパクトが弱い、全河川の足並みを揃えるまでにはまだ時間がかかり、今さしあたってできることは、ホームページで少しでも各河川の情報がわかりやすいように工夫して情報提供することぐらいであり、まずはできることから取り組んでいくということで如何か。
- 全会一致で決定した。

(4) サーモンフィッシングと地域振興について

(茶路川)今年初めて茶路川に韓国の方の参加があったが、これからは日本のサケつりに外国人の方が参加する機会が増える可能性もあると考えられるので、今後に期待したい。

(5) 意見交換

(新潟県荒川)

- ・荒川では数年前からサクラマスを遊漁に開放しており、3/16～5/31の期間中に100～150名程の参加がある。本州ではサクラマスを釣りに開放しているが資源が少ないという課題があり、河川工事などによる河川環境の悪化による影響は否めない。河川整備は従来は治水、利水の視点のみであり、近年は河川環境保全という要素も加わったが、これまでに人工的なものを造りすぎたことが資源に影響を及ぼしている。

- ・北海道では本州に比べるとサクラマス資源が豊富であるが、サクラマスを釣り人に開放する考えはないのか。また、河川整備に関して行政へアプローチするにあたり、キーワード的なことがあれば、教えていただきたい。

↓

(北海道庁)

- ・サクラマスは道内水面調整規則で採捕を禁じている。サクラマスは増殖が難しく北海道でも資源は低迷している。漁業者が増殖経費を負担しており、親魚の保護が極めて重要であることから、現時点ではサクラマスの採捕はすべて禁じている。現在、遊漁も含めた資源の持続的な方法を検討している。地域によってはサクラマス資源に関する状況が異なる。忠類川から報告のあったサクラマスの遡上生態に関する調査は興味深く、今後これらの結果も踏まえて遊漁への活用も含めて検討していきたい。
- ・サクラマスの資源造成が難しい要因の一つにヤマメ釣りによる資源の減耗があると考えられるので、釣りによる減耗を防ぐために資源保護を周知するなど、地道な取り組みを続けていくことが必要であると考えている。河川工事については止める訳には行かないので難しいが、最近では環境に配慮した工事技術も向上していると思われる。

(新潟県荒川)

- ・荒川では川の近くでキジ猟が行われおり、猟友会と話して釣りと猟の住み分けをしているが、他の川では釣りと猟の間で問題はないか。

↓

(青森県奥入瀬川)カモ猟が行われているが、時間で分けているのでトラブルはない。

(北海道忠類川)10/1～ヒグマ、10/23～エゾシカの猟が始まるが、猟友会を通じてサケつりが行われている期間中は忠類川周辺での猟はご遠慮くださいと周知しており、これまで問題はない。

(6)次年度以降の「日本サケつりサミット」について

○次回は、浜益川(石狩市)で開催する方向で検討する。

- ・浜益川で開催していただきたいという要望が複数の河川からあった。

○意見交換

(会長代理)

- ・サケつりサミットは1年に1度各河川の担当者が会ってざっくばらんに情報交換、意見交換し、つながりをつくるということだけでも、お互い参考になり次につながるという趣旨で進めているが、開催地の河川に大きな負担がかかっていることも事実である。今



後の進め方については、毎年の会議は実務担当者による実務的な内容の濃い協議の場とし、サミット会議は5年か10年毎の節目の年に人を集めて大きな規模で開催するというところで如何か。

↓

(結論) 協議した結果、「どこの川も経営は厳しいが、維持するためにどうするかを考えなければならず、サミット会議のように他の地域の先進的なものを見たり、話したりする機会は絶対に必要であるため、このような機会は継続して持つべきである。」という考えにより、現在の体制でサミット会議を継続する方向で進めることとした。

(7) 全国協議会の次期会長について

○忠類川の鈴木会長が留任することで決定した。

- ・全国協議会の会長の任期は2年間であり、今回が改選であったが、参加河川より忠類川の鈴木会長に留任していただきたいという意見が多く、全会一致で決定した。

(8) その他意見など

(水産庁) 日本釣り振興会が釣り人のルール・マナーに関するパンフレットやポスターを作成し、メーカーを通じて全国の釣具店に配布している。他の県でも地域を指定して配布することができる。昨年は12都道府県に配布した。釣具店に配布したい希望があれば活用していただきたい。

懇親会



各河川からのPR



郷土芸能「ならは天神太鼓うしお会」の皆様による太鼓演奏



マグロ解体ショー